



## 情報化の時代に

### ■ 羽生 善治

将棋の過去のデータを調べるときには棋譜データベースというものを使っています。

現在、約8万局の古今東西で行われた対局を自由に見ることができます。人名、戦法名、年月などさまざまな種類の検索ができるのですが、中心的に見るのは最近のものが多いです。

それでも「新手一生」をモットーとされた升田幸三先生の棋譜はデータベースができてからたくさん見ました。そこで、昭和20年代、30年代にすでに現代的なスピード感覚を持っていることを知ったときの衝撃は実に大きいものでした。おそらく、30年か40年は先を走っていたのだと思われます。当然ながら当時では誰も何をやっていたかは解らないわけですから真のパイオニアというのは評価されないのだと思いました。また、升田先生はきわめて強い個性の持ち主であったのでそちらの方にスポットライトが当たったのかもしれませんが。

このような考古学的な発掘としてデータベースを使う可能性はあると考えています。実際は対局が忙しくてそちらまでは手が回らない一面もありますが……。

データベースを調べていて思うのは、情報は量によって厚みが増えるということです。量が多いほど調べて分析をしたときに全体像を捉えやすくなります。また、必要なものと不必要なものを区分するプロセスで頭の中が整理されることもあります。将棋は歩の位置が1つ

■ 羽生 善治  
将棋棋士

昭和 45 年埼玉県所沢市出身。6 歳で将棋を始める。昭和 57 年 6 級で二上達也九段に入門。昭和 60 年四段に昇段。プロ棋士となる。平成元年初タイトル竜王を獲得。著書に『羽生の頭脳 1～10』（日本将棋連盟）、『大局観』（角川書店）等がある。



違うだけでまったく異なる状況になる「似て非なる局面」が実に多いのです。それによって記憶が混乱することもよくあります。ですから、正確にデータを表してくれるデータベースはありがたいのです。

時系列で追っていくとどのようにして最先端の形までたどり着いたのか解るわけですが最近、少し変化があります。それまではデータベースにある公式戦でアイデアが表れてそこから次の対策、アイデアが生まれるというプロセスでしたが、昨今は公になる前に研究が進んでしまい、1 回も公式戦で指されることもなく結論が出てしまうこともあります。それでも良いわけですが、後から調べるときにその部分はデータとしては空洞となってしまいます。何か違う形で進歩のプロセスを残す必要があるのではないかと考えています。これからもデータの重要性は変わりありません。たくさんの情報の中からどのように個性的にデータを切り取り、本質的なものとして消化をできるかが問われているのだと考えています。

